宮崎県のヤマノイモ科植物

斉藤　政美（宮崎植物研究会）

はじめに

野菜に長芋とか山芋と呼ばれるグループがあります。形も細長いものから、丸いもの、イチョウの葉っぱみたいなものなど様々です。いずれも、粘りのある独特の食感があります。これらは、自然薯を除いていずれも畑で作られる野菜です。もっとも、最近は自然薯も畑で作られるようになりましたが。これらの芋類はすべてヤマノイモ科ヤマノイモ属に属する野菜ですが、葉っぱなどはよく似ています。ところが、宮崎県の野山には、このヤマノイモ属の植物が 10 種類近く生えているのです。これらが食べられるかどうかということは興味を持たれるところでしょう。今回はそんな植物たちを紹介します。

1　ヤマノイモ　*Dioscorea japonica* Thunb.

県内では俗にヤマイモと呼ばれていますが、正式にはヤマノイモと言います。自然薯もこれになります。野山に普通に見られるつる植物です。他の種類との見分け方をご存じでしょうか。答えは簡単です。葉が互生か対生かで見分けることができます。ヤマノイモは下の写真のように葉は対生です。ただ、小さな株は互生になることもありますので、識別は難しくなります。花が咲くのは 7 月から 8 月です。雄花は写真のように上向きに咲きます。そして、雌花は下向きに咲くので、簡単に見分けることができます。



図 1　ヤマノイモの葉と花



図 2　ヤマノイモの雄花（左）と雌花（右）

ヤマノイモを語るに、もう一つ忘れてはならないことがあります。それはムカゴができるということです。ムカゴができるか否かということはこのグループを識別するとても大きな要素になります。ムカゴとは、葉の付け根にできる直径 1cm 前後の丸いかたまりです。ご存じのように、これがまたおいしいのです。どうでも良いことですが、私の車には常に傘と棒が積んであります。



図 3　ヤマノイモのムカゴ

2　ナガイモ　*Dioscorea polystachya* Turcz.

ナガイモって、野菜のナガイモと同じものですか？　そう、あのナガイモです。ナガイモは日本原産ですか？　いえ、中国原産と言われています。では、なぜここに書くのですか？　それは、宮崎の野山で見かけるからです。

すみません。ちょっと遊んでしまいました。でも、最初は驚きました。野山で出てくるのですから。新種か？と思ったこともありました。でも結局、ナガイモと結論づけました。なぜ野山に生えているのか分かりません。でも、あちこちに生えています。

ナガイモは葉が対生です。ヤマノイモによく似ています。ヤマノイモ属で葉が対生なのはこの2種しかありませんので、もし葉が対生のものを見かけたら、このどちらかです。と言っても、ナガイモはそんなにありませんから、葉が対生のものは99.9%ヤマノイモと判断されて結構です。

では、見分けるポイントはどこでしょうか。一つは葉の形です。ナガイモの葉は、葉の基部が奴凧のように広がります。また、つるや葉の一部が紫色になることもあります。下の画像でも、それは確認できると思います。

また､ナガイモもヤマノイモと同じようにムカゴができます。ヤマノイモのむかごにそっくりです。

私の観察では、ナガイモのムカゴは夏頃からできますが、早く採集してもおいしくないようです。



図4　ナガイモの葉と花（雄花）

3　ニガカシュウ　　*Dioscorea bulbifera* L. f. *spontanea* (Makino) Makino et Nemoto

ニガカシュウとは、苦いカシュウイモという意味です。では、カシュウイモとはどんなものでしょうか。それは、かつて椎葉村や西米良村で栽培されていました。ヒメとかマヒメという名前です。今も栽培されているのかは分かりません。カシュウイモは食べることができます。産後の食べ物に良いとかで、重宝されていました。

ニガカシュウとカシュウイモは外見では区別はできません。それは、同じ種だからです。カシュウイモは中国原産で、食用にされる栽培植物です。ニガカシュウは同じ種類ですが、苦くて食べられません。そのニガカシュウは宮崎の山野に普通に生えています。学名の *spontanea* は「野生の」という意味です。

ニガカシュウはこのグループの中では最大の大きさになります。つるも長いし、葉も大きいです。ウチワほどはありませんが、それに近い大きさになります。県内の野山で大きなヤマノイモ科の植物を見かけたら、間違いなくこれです。



図5　ニガカシュウの葉

このニガカシュウもムカゴをつけます。大きいものでは直径が5cmほどにもなります。これが食べられたら最高なんですが、残念ながら食べられないようです。ちなみに、カシュウイモもムカゴは食べず、土中の芋だけを食べるようで、私も食べたことがあります。最近は宇宙芋とか言って、ムカゴを食べる園芸種も出回っているようです。



図6　ニガカシュウのムカゴ

4　オニドコロ　　*Dioscorea tokoro* Makino

さて、これから紹介するヤマノイモ科の植物はすべてトコロ（ドコロ）の名前がつきます。このオニドコロの学名にも、*tokoro*　がついています。このトコロが基本になって、他の種にもトコロの名がついたのかもしれません。これらは、ムカゴをつけないことも共通しています。また、芋も食べられません。県内には、アマドコロとかハシリ

ドコロという植物もありますが、ヤマノイモ科ではありません。根の様子がオニドコロに似ているのでしょうか。

オニドコロはヤマノイモと並んで、県内で最も普通に見られるヤマノイモ科の植物です。葉が広くて丸いのと、葉が互生するので簡単にヤマノイモとは区別できます。なぜオニという名前がついたのかは、私にもわかりません。ヤマノイモよりも葉が丸くて、大きく見えるからでしょうか。

オニドコロが咲くのは７月から８月にかけてです。山野の道端などで普通に見かけますので、探すのは簡単です。やはり雌雄異株なので、雄花を付ける株と雌花をつける株があります。



図７　オニドコロの葉と花（雄花）

５　ヒメドコロ　*Dioscorea tenuipes* Franch. et Sav.

オニドコロと同じように平地でも見られる植物ですが、数はオニドコロよりは少ないです。なぜヒメなんでしょうか。葉っぱはオニドコロに比べ、ほっそりとはしています。時にはオニドコロによく似ますので、識別が難しいかもしれません。では、どうやって見分けましょうか。オニドコロの葉っぱは明るい黄緑色ですが、ヒメドコロは明るくない緑色をしていることが多いです。そして、葉の先端は細くなります。でも、これだけでは慣れないとなかなか難しいです。もっと簡単な方法があります。ヒメドコロの葉の付け根には長さが1mm程度の突起があります。これを確認していただければ識別できます。あと、ヒメドコロは葉の裏が白っぽいのも特徴です。

花の時期はオニドコロと同じように７月から８月にかけてです。雄花も雌花も下に垂れ下がりますから、雄しべ･雌しべを確認する必要があります。



図８　ヒメドコロの葉と花（雄花）

６　カエデドコロ　*Dioscorea quinquelobata* Thunb.

これまで紹介してきた植物たちは葉の形がそう大きくは変化しないものが多かったですが、このカエデドコロは葉がカエデを思わせることから、この名があります。といっても、諸条件により形は大きく変わります。正にカエデを思わせるものからオニドコロやヒメドコロによく似たものもあります。見分け方のポイントは２つあります。一つは、カエデドコロの葉の表面には毛があるということです。それを確かめるにはルーペが必要ですが、目の良い人なら肉眼でも分かります。もう一つの方法は花を見ることです。これまで紹介してきたものは白っぽいものや黄緑色をしています。しかし､このカエデドコロは黄色をしています｡ややオレンジ色に近い黄色です。黄花のヤマノイモ科の植物を見かけたら、99.9％、カエデドコロです。



図９　カエデドコロの葉と花（雄花）

7　タチドコロ　　*Dioscorea gracillima* Miq.

おそらく、株が立ち上がるからこの名前があるのでしょう。でも他の株も立ち上がるので、この種類だけの特徴とは思えません。この株を県内で見たのは 1 か所だけです。気がついたのは高千穂町で、2007 年のことです。2 株ほどが近くの木々に巻き付いていました。国の絶滅危惧種にはなっていませんので、おそらく他県にはそこそこあるのでしょう。でも、本県で現在確認されているのは、ここだけです。昨年見に行ったら、元気に生育していました。何よりです。特徴はというと、外見的には大きな特徴はありません。次に紹介するツクシタチドコロやオニドコロなどに似ています。でも、最大の区別点があります。それは花の色が淡いオレンジ色だということです。先ほど、オレンジ色の花だったら 99.9% カエデドコロだと書きました。残りの 0.1% はこのタチドコロだったのです。



図 10　タチドコロの葉と花（雄花）

8　ツクシタチドコロ

Dioscorea asclepiadea Prain et Burkill

ツクシというのは、九州という意味です。日本国内で九州にしか生えていない植物です。しかも、南九州だけです。全国的にも珍しいので、環境省は絶滅危惧Ⅰ B 類に位置付けています。上から 2 番目のランクです。ツクシタチドコロは県内の数か所で確認されていますが、決して多くはありません。県も絶滅危惧Ⅱ類に位置付けています。特徴は葉が長いところです。慣れないとなかなか区別が難しいかと思います。もう一つの特徴は花の時期が非常に早いということです。このグループでは開花が最も早く、4 月下旬から 5 月中旬ごろまでに咲きます。タチドコロは 5 月から 6 月にかけて咲きますし、ツクシタチドコロの花は黄緑色なので区別できます。



図 11　ツクシタチドコロの葉と花（雄花）

9　キクバドコロ

Dioscorea septemloba Thunb. var. *septemloba*

いよいよ最後の紹介です。キクバ（菊葉）の名がついていますが、菊の葉には似ていません。別名をモミジドコロと言いますが、むしろこちらの方が相応しいような気がします。しかし、モミジドコロとするとカエデドコロと混同してしまいますので、そこらへんがややこしいところです。キクバドコロとカエデドコロは良く似ています。私もよく間違っていました。最大の区別点はモミジのように切れ込んだ葉の先がとがるか丸くなるかです。下の写真をみていただければ、とがっていることが分かると思います。このキクバドコロは絶滅危惧種にはなっていませんが、数は少ないです。内陸部の山地にしか生えていません。似たものにウチワドコロというのがありますが、それは九州にはありません。



図 12　キクバドコロの葉（中央）